

人間の土地

下巻

竹内泰宏



竹内泰宏

人間の土地

下巻



海峯書房新社

人間の土地 下巻

初版印刷 昭和五十一年十一月十五日

初版発行 昭和五十一年十一月二十日

著者 竹内泰宏

著者略歴 一九三〇年東京に生れる。東京大学
経済学部卒。一九六八年、長篇小説「希望の砦」
で河出長篇小説賞を受賞。著書に小説「見張り」
（文芸賞作品集・河出書房新社）のほか、評論
「視点と非存在」（現代思潮社）、「想像的空間」
（せりか書房）、「境界線の文学論」（河出書房新
社）、「アジアのなかの日本文学」（筑摩書房）
など。現在日本 A A 作家会議会員。

装幀者 阪本文男

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五
電話東京三五五局五三一

（大代表）振替東京〇一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 中西製本印刷株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。

下巻 目次

第三部

第七章 二つの寺 5

第八章 一位の樹の下で——中州部落 62

第九章 火炎 110

第四部

第十章 不在の時 151

第十一章 壁の中・壁の外 202

第十二章 裁判 250

終章 エピローグ 295

人間の土地
下巻

第三部

第七章 二つの寺

1

5

深い苛だちと悔恨の沼から目覚めると、そこは樹々にかこまれたくさむらのなかだった。須山は熊笹のあいだの湿った地面の上に横たわっていた。樹々の茂みはいまやと白みがかつてきた東の空の下にすこしずつその姿をあらわし、乳色のうちにかすかな金色をおびた朝の空気が、黒樺くろばの樹皮や葦の葉や羊歯しだの葉の輪廓を薄紙を剥ぐように浮きださせ、夜露に混った下草の匂いや腐った葉のつまった土の匂いの漂うなかに、夜と朝の境いめの時刻を形づくっていた。ぶなの茂みの濃い影の落ちてくるすぐ眼の前の窪地の底には葦と雑木のあいだに湧きだしている沼があり、樹々の幹の隙間からのぞけるよどんだ水面からは、とどころに葦が生えていた。明け方の光は一瞬ごとに鮮明な光沢を放ちはじめ油を塗ったような雑木の枝葉のあいだから筋になって水面に射しこみ、沼の縁に立つ一本の柳に似た樹の重くたれた長い葉の影が、鏡のような光をたたえた水面の上をまるで細かくちぎ

れた濃い色の布地のように滑っていた。

もう馬のいななきも、蹄の音も、聞えてはこない。鳥のさえずりが高い梢の上で何度か聞え、静まりかえったあたりの空気をかき乱した。須山は夜露でびっしょり濡れたズボンを脚の皮膚から剝がし、地面の上に立ちあがろうとしたが、首筋から肩にかけての鈍い痛みのためにふたたび横たわった。

かれはいま、忘れていた自分に眼を覚ましたばかりのようだった。沼は昨日見たのと同様に生死のあいだになんの境界もない、生命の片鱗さえその生きたままの姿では存在を拒まれているかのような沈黙に包まれている。朝の光は昨夜の星空の下の黒い物体や、岩の形や、墓場で踊る人びとの記憶を吸いこみ、沼の水面をほのかな輝きのなかにひきずりだしてはいたが、かれのやってきた遠い都会とこの場所を距てる長い距離も、この土地へ着いてから過したまる一日あまりの時間も、この沼地を蔽っている時の停滞にくらべれば無いに等しく、沼は時をその底に沈める深いよどみのようであった。

あれはなんだったのだろうか？ 須山の記憶には昨夜月明かりのなかで見た岩屋のそばでの新造とおるいの演じた信じられないほどの奇妙な光景と、そのそばの穴のなかに最後に見た怖ろしいものの形が、まだ灼きついていた。追いつがる作次という寺男の足音を逃れ、暗い垂直な崖を跳びおりてようやく逃げおおせたことまでは覚えていた。そしてこの沼のほとりの茂みに身を隠し、しばらく息を殺して耳を澄ましていたのだった。追ってくる人の気配は感じとれず、ひとまず安心したが動くことはまだ危険に思われたので、そのままくさむらのなかに身を横たえて朝になるのを待つうち、かれはいつか眠りに落ちていたのだった。

熊笹の葉や雑草に切りつけられて細かい切傷のついた腕や脚が、昨夜の出来事を証す証拠のように、足腰の痛みと共に残っていた。その痛みに、かれにふとまだほんの子供のころにちょうどいま眼の前に見ているような沼にはいつて、手脚をひるにまといつかれたときのことかよみがえってきた。

それは父親が戦死して間もなく、武之原市のそばの山のなかへ隣村へ用足しにいく叔父と一緒に行ったときだった。いまから思うと戦争が終る直前で、艦載機の空襲がその地方小都市のそばの施設にも連日襲いかかっていたころだったのだ。七歳のかれは叔父について隣村にいくために山を越えようとしていた。二人が家を後にしたのは何時間も前だったので、空襲警報が出ていたことは叔父も知らなかったようだ。山越しの途中で、突然黒い小牛のような見馴れない形の単発の飛行機が武之原駅の上空から、須山と叔父のいた山間に機首をさしむけてきた。低空を飛ぶ大きな爆音に驚いた須山たちには身を隠す場所がなく、あわてた叔父は須山を抱いてそばにあった沼地にとびこみ、岸辺の草に身を隠した。水面を震わせるほど烈しい爆音を伝えて頭上をかすめた飛行機は、翼の前方に二筋の平行に並んだ薄い煙を吐き出したが、それは駅の方へむけて放ったロケット弾だった。一瞬後、飛行機は沼の上を飛び去っていった。機影が遠ざかるのを見とどけてから岸辺に上ってみると、濡れた身体のうちこちが切傷のように痛い。みると、脚の脛や、腿や、肘に、赤茶色のなめくじに似た虫が噛みついていて、ぬらぬらした身体をびくびくとよじらせながら皮膚の上を動いている。あわててその一匹を手で引っぱったが粘々したその虫の身体は指がすべって取ることができない。「ひる、は手のひらでまるめるようにしてこすつてとるんだ。引っぱってとったら身体に穴があくぞ」と叔父が言ったが、あわてた須山にはうまくとることができず、叔父も手伝って一匹一匹ようやくとり終えたときには、ひるの噛みついていた跡に幾つもの穴があいて、血が幾筋も手脚を伝って流れていたのである。……いま腕や脚に茎や蔓でかきむしられた切傷のように残っているひりひりした痛みは、そのときのひるに噛まれた痛みに似ていたが、痛みそのものよりも身体にまといつくひるに似たものの恐怖が、まだ須山のうちから去っていなかった。それはこの土地にやってきてから見聞きした昨夕からの出来事がかれのうちによびおこしているものに似ていた。かれは自分がこの土地にやってきた動機を越えて、ちょうど眼の前の沼の底に棲んでいる生物たちに似た正体の知れない者たちのつくる隠微な葛藤に、

知らないまに深くかわわっている自分を思い知らされないわけにいかなかった。

映子は本当にどこへ行ったのだろう？ 映子のことを考えると須山の胸が痛んだ。どうしておれは昨夜あるとき、あの二階の部屋に彼女一人を置き去りにして、本堂へ寺女を追いかけたりしたのだろう？ 昨夜見聞きしたあの寺女と新造との会話や、山の上の馬場での新造の奇妙な行爲は、その意味がはつきりとはわからないまま、土地の話をもちかけた須山と映子の身に迫る危険の不吉な予感さえともなつて思ひだされるのだ。映子がどこに出かけたにしろ、もし一人でまたあの万光寺に帰っていったりしたら、それこそなにが起るかわからない。一刻もはやく彼女を探しだして、夕べ見聞きしたことを告げて用心させなければならぬ……。だが彼女はどこにいるのだ？

立ちあがって、痛む足をひきずりながら、須山は歩きはじめた。映子はやはり、清水村にあるとう、あの清水新吾の墓へいこうとしたのではないだろうか。夕べ双面宿讎の岩屋へいきたいと言ったのも、本当は須山と一緒に自分の祖先の墓へいくのがいやだった——すくなくとも、一人でそこへいきたいという気持が働いていたからではないのだろうか？ なぜなら彼女は昨夜須山の追つていった双面宿讎の岩屋にはいなかったようにいまでは思われるからだ。いつかタブロイド判の私家版新聞で読んだ八日町清水村の寺、一つは彼女の祖先がその住職の首を斬った寺であり、また清水家の墓があるという愁恩寺、そしてもう一つは以前はそこに新吾が清水家の新しい寺を定めたという光明寺——その二つの寺のある八日町清水村は、映子に新宿で見せられた地図の記憶をたどると、高原駅の反対側の山裾のあたりにあるはずであった。須山は昨日からの予定であった清水村へいくことに心を決めた。

そのとき沼の岸から離れようとして、なに気なく水面に視線を投げかけた須山は、ちょうど柳の木影の落ちていたりの水面が、そこだけ小波を失つて濃い緑色によどんでいるのに眼をとめた。かれはさつきから、それが柳の木の影だと思つて気にもとめないでいたのだが、よく見ると柳の影は

別の方向へ、岸边の葎の上に落ちていたので、水面によどんでいる影のようなものは別の原因からくるものとしたか考えられないのだった。雲のような形をしたその暗緑色の影は、どす黒いがかすかに血のような赤味をおびている。……須山の頭の端を妙に気がかりなものがとらえたが、水面のすぐ下になにか大きな物体が隠れているようで、といって水面の下までは見透すことができないのだった。……地面に視線をもどした須山は、自分の両脚のまわりに、深く二寸ほど地面にのめりこんだ足跡がいり乱れて多数ついでいて、柳の下の柔かい水辺まで点々と続いているのに気がついた。それは人間の足跡にちがいがなかったが、なにかよほど重いものを持って、力をこめて踏んばった足跡のように見えた。かれに、ある直観が電流のように閃いた。新造は馬場であの馬を殺したあと、その馬をこの沼に捨てて、そうしてあの岩屋にやってきたのではないのか？……昨夜双面宿讎の岩の上で、おるいが「水の匂いがする、血の匂いがする」と口走っていたことが思いだされた。須山は柔かくぬかった土に掘られたようにしている足跡をなおもよく眺めた。その土には地下足袋の底のような皺が刻まれている……。するとかれの耳によみがえってくるのは、昨夜寺で立聞きした新造とおるいの会話で、さらにまたあの岩屋のそばで作次が月光の下に掘り返していた埋め墓に確かに見た、頭髮などの人間の死体の部分に似たものの怖ろしい印象であった。……そしていま太陽の光の下で目覚めた須山にとってそれよりも戦慄を覚えるのは、立聞きした二人の会話から想像できるその死体の陰にあるもう一人の生きた人間、生きながら死を予告されて刑務所につながれているという、一人の少年の存在であった。

清水村に行ってみよう。そこには映子にゆかりの深い二つの寺がある。とくに愁恩寺には彼女の祖先の墓があり、そこにはあの私家版新聞に書かれていたような彼女の家と心の秘密がなにかしら隠されているかもしれないのだ。そして映子がそこへ行ったとすれば、その行方が尋ねられるかもしれないな

いのだ。

足もとからつづくなだらかな降り斜面の先に視野が急にひらけ、広い平野のあちこちに散在する人家の屋根や田畠のなかの林が見えはじめた。震えるような薄い靄が、緑の野の日光に輝くうつろな明るさのなかに横たわっていた。それは遠くなるにしたがって、次第に色彩を藤色に変化させながら、遠い山裾の肉体を持たない煙のなかに溶けているのだった。その靄のなかに、遠く高原市の小さな家の屋根の列が、駅を中心に古い瓦をきらめかせながらひろがっているのがかすかに見える。平野の端から端へ、一筋の川が白い川床の砂利を陽に輝かせながら蛇のように彎曲して走り、遠くの平野をとり囲む山裾と山裾のあいだに消えている。清水村の愁恩寺や光明寺は、おそらくその川沿いの上流、山裾の襲にかくれて見えないあたりにはあるはずなのだ。

全景をあらわした高原盆地は、四方を山で囲まれた要害の地である。東の正面に連なる山肌を深い影で彫琢された尾根の先には、はるか遠くに、雪に包まれた日本アルプスの連峰が空にむかって歯をむいた白い波頭のように連なり、氷で磨いたようなまぶしい輝きを放っている。近くの濃い緑色をした山襲のあいだにわずかな山の切れめがのぞいているが、そこを通りぬけていけば一昨日須山の立ち寄った鍛冶屋町のある武之原市へ出、そこからさらに南へ下れば京都にも到達するはずなのだ。

高原市はG県の北端、周囲を高い山で囲まれた高原盆地にある街である。ここから北へ山間を縫って直線距離で八十キロほど行けば日本海岸に面する平野に出て、高原から流れでる小野川の河口にはN市がある。反対に南へ下れば二百五十キロほどで太平洋岸に達し中部工業都市にいたる。だが深い山で交通を遮られたこの盆地は、西方の比較的近い距離にある京都からも北陸以上に隔離され、昔から卑国ひのくにと呼ばれて卑しめられ、土地の人が斐国ひのくにと呼ぶ土地の蔑称となってきた。それでも近くに銅山があり、また豊富な森林をもつこの土地の人びとは独自の文化を保ち、支配下に囲いこんだこの土地から多くをしばりとろうとする京都や江戸の中央の支配者に陰に陽に対抗してきた。清水川の清流に

沿った町並みと寺の配置から小京都と称える人もいるが、金森氏以来の統治者も京都を擬してミニチュア版の京都風で町を装った形跡がある。もっともこの地の人びとの生活は苦しく、徳川末期には附近の農民の一揆が、明治になってからも暴動があり、陣屋の門にはいまも一揆の農民に殺された番兵の血の跡が残っていて、観光案内人の説明に古い大きい鉄鉾のある門の前にたたずむ人が絶えないのだ。現在は市の産業の大部分は木材に関係しており、町の西部を中心としたあたりには製材、合板、家具、建具、頑具などの工場が多く、近代設備の輸出用の典木家具や合板の大工場もできている。その一方では伝統的な工芸として一位細工や名産の赤塗りの漆器などがあって、駅前前の店はそれらのみやげ物で飾られている。それは昨日の午前中に須山も実際に見てまわって確かめたことだったが、さらに市の東方には日本アルプスがあるため、夏はアルプスの西の登山基地ともなり、駅から登山バスを使う観光客も多い。ただ高原の街から少しばかり離れたこの一倉山の周辺となると、もう高原市のなかでもまるで隔離されたように人里離れた感じで、まだとり残されているのだ。

一揆村たちだったらこの土地をどういうふうに使おうと考えるだろうか？ という思いが須山をかすめた。かれの眼のなかに、この地域一帯をかかれらの思い通りに切りきざんだときの姿が、眼の前にひろがる光景に重なって、二重映しの写真のように浮かびあがってくる。だがそれはもはや須山の眼には死の影をおびた陰画に見える……『秘境の高級別荘地』『日本アルプスを望む高原レジャーランド』『高原ロープウェイ特別コース』などのポスターを張りめぐらした鉄道が走り、客は鉄道会社、土地会社、建設会社、ホテル経営者などが寄ってたかってプランをたてた大観光地に集まってくる。最初に土地を大がかりに手にいれた者にとっては、十倍二十倍の値で同じ土地を売ることもできるし、そのまま持っていて利潤をあげることもできる。そして一倉山や一倉城址や、万光寺や、これから訪ねる愁恩寺さえも、裏切り新吾や、城址に生き埋めにされた少女の物語やそのほかの伝説と一緒に、都会生活者の勤め人から家族ぐるみの遊興費を吸いあげる大切なもととなるだろう。……須山の耳に聞

えてくるのは馬場係長のだみ声に混って響いてくる檜村の声だ。『……観光客を大動員するためには、数年後に予定されている高原縦貫道路の開通によって、はじめて関西圏の観光客を大量に集めることが可能となる。その前にレジャーランドを完成させたところで、はいる客はすくないことはわかっているのだ。つまり高速道路の建設進行と歩調をあわせて十分時間を計算してレジャーランドの計画を進めようというのは、われわれにとつては当然の作戦なのだ。——この時さえ計れば成功は疑いない、そしてそれが計れるためには、時そのものをこちらがつくり出すことができれば最も完全な計画となる』ふたたび歩きはじめた須山の行手のせまい山道が、もう一度視野をせばめていた。

降っていく須山のすぐ眼の前に、斜面の土地を細かく区切って耕してつくられた、猫の額のようにせまい段状の畠があらわれていた。そこは昨日もこの山にさしかかかってすぐ見た記憶がある、一倉山の麓に近い場所だった。一面にまるで白い灰をかぶったように白ちゃけた土は、見るからに肥料気のない貧しい土壌だ。不定形に耕された畠のあちこちに出っばっている、ごつごつした岩が見える。須山の耳に、せまい畠地に散在して土のなから突き出している黒い石と畠の土とのあいだ、石の影が落ちた畝と畝のあいだから、人の手に持たれた鋤の刃が何百何千回となくその石にぶつかる鈍い音が聞えてくる。のびそこなったヒエやアワの根のたてる悲しげな悲鳴や、痩せさらばえた男たちの鋤を握る筋肉の軋みが聞えてくる……。『百姓には苦勞のたねですわ。この石の一つ一つをどけるわけにもいかんしね』と昨日この道を登ってくるときに運転手は言ったのだった。その石のどれも、何百年もその場所にあつて、四方を山に囲まれたこの天然要害の地に住む農民たちの打ちこむ鋤の先や、植物の細根の成長をおびやかす、邪魔しつづけてきた頑固な代物にちがいない。『……隠し田と言つてね、百姓がなんとか荒地を切りひらいてつくった土地ですわ……。ところが検地令で代官のきびしい検地増石を言い渡されると、それまで検地から免除されていた土地も取り高を増すために検地帳にいられる。この辺の土地が検地帳に加えられたときは、一揆がおこったということですよ。この辺は

昔から一揆が百年に一度くらい起った土地でね、最後のは明治にはいってからです、街の陣屋に百姓が大勢おしかけて、いまも陣屋の門にはそのときの番兵の血の跡が残っていて、観光名物になってますわ。……婆さまがその頃のことを時どき話してくれたものですわ」

降り続けた細い山道が村の平らな道路と交っている場所へ出た。道路の向う側は低い土手になっていて、澄んだ溪流が流れていた。そこは昨日映子と運転手と須山の三人が、山に登りはじめた場所だった。かれは道路と小径のあいだに生えている一むれの背の高いすすきの脇をぬけて、道路脇の草原の上に降り立った。昨日運転手は、まるで自然によってつくられた車返しのようなその場所にさしかかるとブレーキを踏むや否や大きくハンドルを切り、用心深く自動車の前部を駅の方向にむけなおして、須山と映子に言ったのである。「たぶんこのあたりから登れると思いますよ。一倉城は確かここからすこし登ったところですよ」だがその場所にはもちろんもう自動車は置いてはなかった。昨日寺前の庭で話したきりの運転手は、たぶんあれから街へ帰ったのだろう。

須山は村道の右下を流れるせまい溪流沿いに、清水村があるはずの上流にむかって歩きはじめていた。かれにとつては、もはや映子の行先としては、清水新吾の墓があるという愁恩寺か、あるいは光明寺しか、この土地で探す場所はないように思われた。

かすんだ靄のような大気に包まれて、須山は長いあいだ忘れていた春の気配を、そして川沿いの粘っこい青葉の気配を意識していた。しばらく歩くうち、背後の山をなに気なくふりむいた須山は、鱗のようにひるがえるならの葉の緑色が揺れ動く木立のあいだから立ちのぼっている、一筋の白い煙に目をとめた。かすかに薄桃色を帯びたその煙は、さっきかれが通ってきた尾根の稜線に生え出た一むれの雑木のあいだから真直ぐに立ちのぼって、高いところで横に押し倒されたように風に流れていた。銀色に輝く空に散らばった煙は、はるか上空で薄くなり、白い雲と混じりあっている。《……こんな時刻に、あの山ではだれかが焚火でもしているんだろうか？》

しかしかれはそのまま気にもとめずに先を急いだ。

2

愁恩寺は映子の持っていた地図を見たときの記憶では、眼の前の山裾にそって瓢箪のようにくびれた盆地の北端を奥へはいつて、幾つかの山あいを越し、川沿いの道を上流へと北上した場所にあるはずだった。結局見つからなかつたパスにも乗らずに、須山は川筋をたどって山裾にはさまれた県道を上流へと歩いていった。

襟首が汗ばみはじめていた。歩を速めると、県道のむこうから野良の静寂のなかを須山の方にむかって歩いてくる二人の青年の姿が見えた。青いジーパンにシャツを着た背の高い若い男と、灰色の洗いざらしの作業着を着た赤いもじゃもじゃの髪を長くのばした男だ。とろ味のある煙ったような日射しの下の二人の姿は、距離があるために一向に近づいてくるように見えないのに、二人の話し声だけが、どこか別の場所から聞えてくるかのように風に乗って流れてくる。

「あれは火事だぞ。一体、なにが燃えてるんだろうな？ 一倉山のあそこらには、あんな煙を出せるほど大きなものは万光寺のほかにはないと思っただけだな」

「この季節に山火事なんてないしな」

「まさか。去年の枯れ草がいまごろ燃えだすわけもないがな」

軽く拍子をとるような足どりで歩く二人の青年の影が須山の影と路上の乾いた土の上で触れあつた。二人の視線はすれちがう須山のすそに泥のこびりついた背広服姿をとうにとらえているにちがいないのだが、その視線は須山の肩越しに、かれの背後の山の中腹に上がっている白い煙を喰いいるように眺めているのだった。その視線の先で、一倉山の稜線を越えて立ちのぼった煙は、さっき須山が山の真下から見上げたときよりさらに大きく拡がって、薄い煙の上端が空の色と混りあっていた。